



TITLE:

經濟法則の認識について - 實踐性と階級性 -

AUTHOR(S):

吉村, 達次

CITATION:

吉村, 達次. 經濟法則の認識について - 實踐性と階級性 -. 經濟論叢 1955, 75(4): 225-234

ISSUE DATE:

1955-04

URL:

<https://doi.org/10.14989/132415>

RIGHT:

經濟論叢

第七十五卷 第四號

經濟學をいかに學ぶか

現代の經濟學と古典……………青山秀夫……（2）

經濟學の歴史的研究の意義……………出口勇藏……（9）

經濟法則の認識について……………吉村達次……（25）

會計學的觀點と會計學的思考……………酒井文雄……（35）

一八三〇年イギリス下院の階級構成……………佐藤明……（55）

ドイツ帝國主義と「結集政策」……………大野英二……（74）

ドイツ共和民主國における經濟發展……………金鍾碩……（93）

公有林野統一に現れた絶對主義的經濟政策の特質
……………鶴嶋雪嶺……（114）

ロック・ウッド著 日本經濟の發展（1868—1938）
……………堀江保藏……（130）

〔昭和三十年四月〕

京都大學經濟學會

經濟法則の認識について

——實踐性と階級性——

吉 村 達 次

昨年の近江絹糸の爭議はいろいろな意味で大きな社會的影響を残したが、その中でわれわれが見逃しえない重要なことは、百五日にわたる鬭争の中で爭議の主力であつた近江絹糸の女工さん達自身が眼覺ましい階級的成長をとげたことである。それは第一に彼女達の日常の生活をかく縛りつけていた資本主義的なまた封建的なくびきの一つ一つを打破る鬭いを通じて、強固な團結と統一をつくりあげたことであり、第二には、今まで絶対に動かしえないものと思われてゐたそれらのくびきを、彼女達の鬭いによつて動かし變えてゆけるものだということをさとつたこと、つまりかつて地動説を發見したコペルニクスと同じような思想上の變革をなしとげたことである。このような體驗を一女工は、總評事務局長高野實氏宛の手紙の中でつぎのように書きつづつた。

「朝（五時）機械の前に立つたとき、頭の上には、いつもの通り電燈が光つていました。私の機械もちつとも變つてはいません。いつもの通りの早さでまわつています。モーターのうなりも、白い糸の走るさまもいつもとおなじです。つまり、人間と機械との關係はちつとも變つていませんでした。

しかし人間と人間の關係は、ずいぶん變つてゐるのではないかと思われまゝ。例えば、私の前にゐる子、うしろの子、左右にい

る子たちは、もうただの友だちではありません。百五日の間、生命をかけて闘つた同志です。立派な同志です。それから、私が少し歌をうたつても少し位おしやべりをしても、職制は何ともいわず、みてみぬふりをしています。つまり人間と人間との關係はずいぶん違つたように思えるのです。いつか、高野さんが、階級闘争というものは、人間と機械との關係を変えるのではなくて、人間と人間との關係、すなわち、支配・被支配、搾取・被搾取の關係を変えるのだといわれましたが、本當にそうだということがわかりました。ありがとうございます」。

高野氏は「この一節の中に、マルクスの經濟學が鑑詰のようにつまつてゐるのを見た」と感想をつけ加えている（中央公論二月號七六頁）。まつたく同感である。マルクスの經濟學の精髓は、資本主義の下では經濟關係は物と物との關係、つまり商品と商品との關係、或は人と物との關係、たとえば人間と機械との關係という外觀をとるが、それらはいづれも人と人との關係、すなわち資本家と労働者との搾取關係の假象にすぎないことを明かにし、そのような資本主義制度は永久不變のものではなく歴史的に特定の時期に發生發展しやがては崩壊すべき必然性にあることをしめし、さらにこの制度の崩壊は階級的に眠ざめた労働者階級の資本家階級に對する闘争によつてのみ實際に成し遂げられること、資本主義を破壊したのちには労働者階級が國家の權力を握り、生産手段をその手に集中しやがて階級そのものを止揚するに到ることを證明した點にある。これらの根本的諸命題は見事に右の一句に盛りこまれている。この女工さんはこのような豊富な内容を闘争の中で自分のものにし、社會に對するものの見方を根本的に變えることが出来たのである。では階級闘争はそれに參加する労働者をどうしてこのような高い認識にまで必然的に導くことが出来たのであろうか。

人間の認識作用はいうまでもなく認識する主體と認識される客體との間に成立する一關係であるが、客體に對する認識主體の關係は單に受動的なものではなく、主體の方から客體を知ろうとして積極的につまり能動的に働きか

ける側面をもっている。人間の認識作用が動物のそれと區別される點は特にこの能動性にある。すなわち意識は對象を單に反映するといふだけではなく、對象に對する主體の働きかけによつて對象をいろいろにつくりかえ、對象のかくれた性質を認識することが出来る。この際このような認識主體の能動的働きを可能ならしめるものは認識主體と客體とを媒介する物質的手段、つまり生産においては勞働要具、研究室では實驗機具や化學藥品の利用であり、これによつて認識は物質の現象形態から本質へとより深くすすむることが出来るのである。

しかし社會現象にあつては自然現象の場合とは異なる。社會現象においては認識する主體自身が同時に社會的存在として他人との間に一定の社會的關係を客觀的に結んでおり、従つて認識される客體でもあるから、自然現象の場合のように認識主體と客體との間に物質的な媒介手段を用いる餘地はない。それに代るものとして抽象力——分析力と綜合力としての思惟の作用——のみに頼らねばならない。抽象力はそれを擔う主體自身が客體に對して直接的に働きかけることによつてのみ客體の現象をつきやぶつて本質にまで迫ることが出来る。ところが認識主體のこの働きはそのまま社會的存在としての彼自身の行動すなわち他人に對する彼自身の社會的實踐とならざるをえないという關係が生れる。しかるに他人に對する能動的行動は、兩者の社會的關係の性質——第極的には生産關係によつて規定される——その他に諸々の社會的關係によつても規定される——のであつて、行動の形態は或る場合にはたとえば話し合いという形態となり或場合には直接的行動による鬭争という形態をとるが、これらの形態を通じて人間は相互に他人に働きかけ、他人の社會的本質——内容を認識することが出来ると共に認識主體自身の社會的本質をも明確に認識することが出来るようになるのである。

これをさきの女工——かりにAと呼ぶ——の場合で見れば、彼女もまた信書の自由が奪われていることに強い不

滿をもつたのであらう。そこで同じような目にあつてゐる女工Bに話しかけ、Bも同じ不滿をもつてゐることがわかつたので一諸に會社に對して信書の自由を要求し、その闘いの中でAにとつてはBはもはや今迄のように「ただの友人」ではなく「同志」として感じられるようになったのである。換言すればAはBと話し合うことによつてAもBも擧取に苦しむものとして階級の本質を同じうするものであることがわかり、また資本家に對する闘争の中で行動を共にすることによつてBという個人を自分と同じものとして或は自己の本質の表象としてつまり同志として感じる事が出来るようになったのである。前の過程はいはば個別から普遍——階級を分離する分析の過程とすれば、後の過程は「階級性」をBという個人の具體的姿において生き生きと直感せしめる過程、普遍——本質を現象化せしめる過程であり綜合の過程である。

このように社會現象における認識の道具としての抽象力は、思维の作用ではあるが、單に頭の中だけでの分析綜合という操作によつて抽象物——本質を見つけ出すのではない。話し合いや統一行動等の實踐を通じて、單なる個別的人間としてではなく意識的に階級的人間として實際に行動すること、單なる思维の構成物ではなく客觀的な人間の社會的存在形式であるところの「階級」という抽象物を、實踐を通じて現實の生き生きとした感性の對象——同志という表現においてとらえられる個別的人間の姿——にまで形象化せしめることが、抽象力の實際の内容である。このような内容を抜きにした抽象力は單なる空虚な形式にすぎない。このようにして近江絹糸の女工達は所謂「即自的階級」から「對自的階級」に、つまり自己の歴史的使命を自覺せざる階級から自覺した階級へと實際に高まつたのである。ここでは認識の能動性は直接實踐と結びあい、人間の行動力として作用することによつて、現實の人間自身を變え、現實を變革する力となる。これが社會的に行動する人間の能力として受動的な感性的認識から能動

的な理性的認識にまで發展する思惟の現實的内容である。實踐そのものの中で現實的抽象物を現象から分離し、次いで再び現象へ發現せしめるという生成の過程を意識に反映したものが思惟における感性的段階から理性的段階への發展すなわち、直感から思惟へ、そして思惟の諸形式の形成えという發展に他ならない。そしてまた現實の抽象過程の發展を諸概念の繼起的發展として表現するものが理論である。こうして一度形成された理論はしかしながら現實の認識過程における能動性を一層促進しその發展を強力にやる上に極めて積極的役割を演じるのであつて、急速に大衆の階級的自覺をたかめる必要が差迫つてゐる條件の下では大衆の理論的武装がこのような意味で缺くことの出来ない重要な問題となるのである。

このようにまづ個々人の要求をとりあげ、それにもとづいて統一行動をおこし、その中で階級的團結の思想を個々人の行動力の一要因たらしめる過程は認識における唯物辯證法的發展にほかならない。すなわちかかる現實の社會的要求をもととする實踐の展開、或は同じことだが、要求の發展の中にこそ、社會の諸法則は生きて動いてゐるのであつて、従つて、諸法則の思惟による把握すなわち理論は、かかる要求と要求の發展とを忠實に追跡することの中にその正しさを保證されるということが出来る。従つてかかる要求に認識の源泉を求める限り社會科學は唯物論的たらざるをえず、要求の發展を追求する限り辯證法的たらざるをえない。このような意味で社會科學における方法論としての唯物辯證法は、認識の源泉を大衆の實踐的要求の中に目的意識的に追求することの中に生きて働いてゐるということが出来るであらう。主觀的には觀念論者であつても、強い現實的關心からして大衆の要求にそい、それに基礎をおいて理論の展開を試みようとするかぎり、客觀的には唯物辯證法的たらざるをえないということもここから起つて來るのである。何か頭の中でさきに唯物辯證法がありその枠の中に現實をはめこむことが方法論と

しての唯物辯證法ではない。

社會的認識においては實踐一般の役割を強調するだけでは不充分であつて、實踐の重要性に應じて、「階級性」のモメントを缺くことが出来ない。それは二つの意味をもつてゐる、労働者階級がその階級的立場を徹底的につらぬくことによつてのみ社會法則の客觀的認識は保證されるということと、社會（經濟）法則の把握は労働者が自分を自覺的階級にまで高めるために決定的に重要であるということである。

近江絹糸の女工達は闘争の中で、資本主義經濟は人と人との關係を人と機械、物との關係として表現するものであり、従つて人と人の關係を變革することによつて資本主義經濟そのものを變革することが出来ること、次にこの關係は闘争によつてのみ實際に變革しうることを學んだのであるが、彼女達はこのような自覺を階級闘争という特殊な實踐によつて獲得したのであつて單なる實踐一般によつてえたのではない。彼女達は信書の自由を資本家に要求し且それを承認せしめたのであるが、それを彼女達は闘争によつて獲得した。だから信書の自由の承認は、資本家の労働者に對する支配力の弱化という結果をもたらした。そこから彼女達は信書の自由を獲得した以外に、資本主義の本質が人と人との關係であり、従つて、階級闘争によつてその關係を變更しうるものだという自覺をえた。すなわち信書の自由というむしろブルジョアの要求をにかけて實際上は階級闘争を行つたのであり、だからこそ所謂人権闘争を通じて資本主義經濟の本質を理解し、同時にかかる經濟法則の理解によつて、自分達の闘争を階級闘争として明確に自覺するようになったのである。

ところで階級的要求は労働者階級のみにかざらないのであつて、資本家階級といえどもその階級の本質に根ざす

ところの要求をもたざるをえない。今日の獨占資本家にとつては低賃銀・合理化・インフレ・増税等あらゆる手段をつかつた労働者を搾取することによつて、最大限利潤を追求することは彼等が資本家として生きんがためには避けることの出来ない要求である。だが労働者もまた人間として生きんとする限り人權尊重の要求や賃銀値上げの要求を資本家につきつけないわけにはいかない。これはまさに二律背反であるが、兩階級の生存そのものから生ずる矛盾であるから、單なる理論上の解決ですむ問題ではなく、現實の解決を要求する問題である。兩者は現實的な力によつて自分の要求を他に押しつけ強制する以外に自分の生存を維持することが出来ない。これが階級闘争であり、自己の要求の下に相手を屈服せしめねばやまないこのような闘争の必要から、相手を知り味方を知る必要が生じ、社會現象に對する單なる受動的認識ではなく、能動的認識の必要が生れてくるのである。

しかし相對立する二つの階級は同じ性格のものではない。資本家は労働者なしには資本家たりえない、従つて、その闘争の特徴は自己を資本家とした維持すると共に労働者を何時までも労働者としての地位におしとどめることに向けられ現状肯定的であり保守的である。しかし労働者の方はそうではない。資本家が存在するかぎり労働者としてとどまらざるをえない運命にあり、人間としての解放を望めないことを幾多の闘争の經驗を通じて自覺し、資本主義に對する徹底的な批判者の立場に立つようになり、必然的に革命的とならざるをえない。ここから前者にとつては資本主義體制の本質の解明ではなく、維持もしくはせいで部分的改善が主要な關心事となり、後者は、反對に資本主義の根本的批判が必要となるのである。

労働者にとつてのこの必要事は、たとえば資本主義の基本的矛盾、資本主義的生産關係——労働の成果が資本家によつて獨占的に占有されるという關係——か、自ら發展せしめた龐大な生産力の結果を處理しえないという矛盾、

そしてこの矛盾から逃がれるためには資本家は労働者に犠牲を轉化し彼等を生活の危機においこむはかなく、労働者は資本家からおしつけられた生活の困難からのがれるためには、この資本家の解決の方法とは反對に資本主義そのものを變革する途を求めねばならなくなつた時に、必然的に生じてくる。だから労働者が資本主義に對して徹底的に批判的立場に立つのは資本主義自身のもたらした必然であり、さけることの出来ないものである。こうして労働者階級による資本主義批判は徹底的であると共に資本主義そのものの客觀的法則の必然性にもとづいて生じざるをえないという性質をもっている。

このようにして認識の能動性が社會的實踐に依存するというだけではなく労働者の階級的實踐に依存することによつて、客觀的眞理の把握が保證される。別言すればこの階級的要求に基礎をおき、それに認識の對象と方法が規定されることによつて、認識の能動性は正しく作用することが出来る。従つて、階級的黨派性は社會的認識の出發點であると共にその到達點でもある。階級的黨派性から出發することによつて社會發展の客觀的法則の認識が可能となり、法則の認識は必然的に階級的黨派的實踐の歴史的必然性の確信に導く。換言すれば認識の出發點は階級的黨派的でなくてはならず、その到達點も同じく階級的黨派的でなくてはならないということにもなる。階級的黨派性の必然性の認識にいたつてはじめて、認識の能動性——認識の唯物辯證法的過程——は、完了するのである。かくて唯物辯證法は現在では労働者階級の個有の認識方法であり、自覺せる階級として生成するための手段となるのである。

以上で、經濟法則の認識が實踐性と階級性にと從つて階級的實踐に依存する關係を若干述べてきたか、なおこれに關連して考慮すべき問題を簡單に列記しよう。

その一つは、認識の黨派性と客觀性の問題に關連して、労働者階級以外の階級に屬する人間の思想變革の問題であり、この場合理論の果す個々の役割の問題である。たとえば同じく小ブルジョアといつてもインテリゲンチヤの場合は比較的容易に労働者階級の陣營に投じうるのも、理論の個々の役割にもとづく點を無視することは出来ない。これは理論が黨派的であると同時に資本主義の客觀的必然の法則を反映してをり、しかもこの法則はいかなる階級に對しても必然的な力をもつてその確認を強要せざるをえないのであるから、それを反映する理論自体もまた、それが人間の頭腦をとらえる程度に應じて同様の作用を人間の行動に及ぼさざるをえない。すなわち自己の解放を労働者階級の解放に結びつけざるをえないことを他階級に自覺せしめる上に一定の役割を果すのである。このような意味では理論は超階級の性格をもつということが出来る。しかしそれは常に歴史的に限定されたものとして何らかの意味をもちうるのであつて、かかる限定のない超階級性は無意味である。すなわちもともと黨派性とは黨派性一般的ではなく特殊なプロレタリア的黨派性であり、従つて資本主義批判におけるプロレタリア階級の指導性をふくみ、それに基いて理論は自らの客觀性を現實に保證され實證されるからである。

ここから次に階級闘争の内容自体により深く立入る必要が出てくる。階級闘争は單に經濟闘争だけではない。人間の社會生活が一般に社會的・文化的・政治的という三つの側面をもつと同様に階級闘争もまたこの三つの側面をもつ。そして闘争の經濟的側面は一般的基础であるが闘争の最高形態は政治的闘争にあり、文化的闘争——イデオロギー闘争——はその中間に位する。階級闘争における政治的側面とは、労働者階級が被壓迫階級全體の解放闘争の中で現實に指導性を確立するということである。労働者階級の階級的自覺は闘争の形態が經濟的闘争から文化的闘争えさらに政治的闘争へと高まるにつれて、すなわち自己の解放を實際に人類全體の解放に結びつけてゆく過程

で完成される。このように階級闘争の最高形態が政治闘争であるということから、逆に經濟的闘争も文化的闘争もこれに従属しなければならないということか歸結される。これを當面の日本の問題についていえば、労働者階級は自己の解放を民族の解放に結びつけている。民族の利益、すなわち一部の買辦層を除き民族を構成するすべての階級に共通する利益を基礎におき、それを達成するために民族解放の國民的統一を當面の目標としている。ここから文化闘争（思想・科學・藝術）の分野における批判と創造も反帝反封建の民主主義的契機或は民族的契機に依據して行われることによつて政治的目標に合致することが出来る。そのような文化闘争は反帝反封建の内容をもつ國民の一切の文化を含む意味でブルジョア民主主義的である。けれども單なる舊來のブルジョア民主主義とは本質的に異なる。何故ならその創造の過程の指導性はもはやブルジョアにはなく労働者階級にあり、従つて志向される民主主義はブルジョア的中途半端性を克服し徹底した民主主義に進む要因を含んでいるからである。しかしそれはまだ社會主義文化が直接に追求されることを意味するものではなく、反封建反帝の國民的要求にもとづく一切の文化を包括しながら社會主義的要素もその一部としてふくまれるということを意味する。それにもかかわらず反帝反封建の國民的要求が社會的發展法則を反映するものであるかぎり、その要求に結びつく程度に應じてイデオロギーとしての理論もまた唯物辯證法的ならざるを得ないということが出来る。

この二點はもつと詳論する必要があるが、ここでは單に指摘するにとどめておく。